

「高井」第五十号別刷

建應寺跡第二次発掘調査

中野市教育委員会



建応寺跡第二次発掘出土遺物



建応寺跡第二号堂址



建応寺跡礎石群発掘



建応寺跡参道

# 建応寺跡第二次発掘調査

中野市教育委員会

## 一、調査の経過

### (1) 発掘までの経過

昭和五二年一一月の建応寺跡緊急分布調査に基づき、当委員会は、昭和五三年一〇月、建応寺跡第一次発掘調査を実施した。その結果、第一号堂址の礎石群は、ほぼ旧態のまま検出され、堂宇の規模を確認することができ、発見された遺物から、その存在の時期は、平安時代後期から中世に及ぶものと推定されたが、確定的判断は今後の調査に委ねられた。また、第一号堂址は、礎石の焼けた跡や木炭片の検出から焼失したことは明らかになつたが、度絶の時期については明確につかむ資料を得ることはできなかつた。

今回の調査は、前述の第一次調査で明らかにならなかつた事柄を探求するとともに第二号堂址、第三号堂址の規模、性格等を究明するため実施することとした。

準備段階として、関係地主の柴本周三氏ほか四名の快諾を得、地元間山部落では区をあげての協力体制をつくっていただき、調査團の編成を終え、法手続きをとるため、九月八日付をもつて文化庁長官に発掘通知を済ませた。

## 二、調査団の編成

今回の発掘調査は第二次であり、実りあるものにするため、経験ある第一次調査での調査員等の皆さんに調査をお願いすることとし、左記のとおり調査団を編成し、それぞれの方々に九月二八日付でご委嘱申しあげた。

### ○ 建応寺跡第二次発掘調査団の編成

調査責任者 菅沼利雄 中野市教育委員会教育長

顧問 金井暮久一郎 長野県文化財保護審議委員

調査団長 今井汲次

信濃史料刊行会常任編さん委員

調査団員 田川翠生 日本書道研究会員、平野小学校教諭

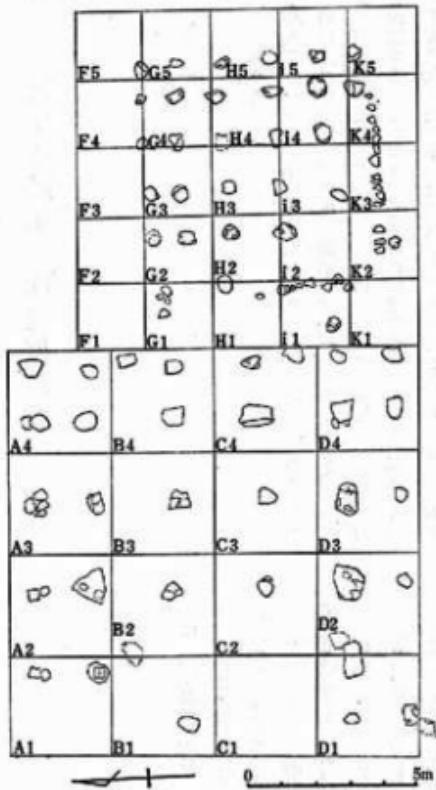
調査補助員 池田安男 高井地方史研究会員  
櫻原長則 長野県考古学会員

小林軍司 中野市誌編さん協力員

会員  
金井文司 長野県考古学会員、小布施町公民館主事  
調査補助員 池田安男 高井地方史研究会員

矢野忠良 高井地方史研究会員  
小林義一 高井地方史研究会員

第1図 グリット図



(1) 発掘経過

一〇月九日(火)くもりのち晴

本調査は一〇月八日から開始する予定であったが雨のため一日延期し、本日から開始した。午前中は、発掘器材等を自動車運搬の最地点から約二〇分程の山道を運びあげた。テント張り、堂址およびその付近の下草刈りや清掃をし、調査の成功を祈って、また、寺院址であることから、池田実男氏説による慰靈を行なう。午後は、

一〇月一一日(木)晴

昨日についてC及びDグリットの発掘を行なった。午後、市文化財保護審議委員四名が視察にみえた。D4からナリ鉢片を見。

一〇月一二日(金)晴

Bグリットに発掘作業が移る。午後、

土製神像片をB3から発見。

神像片が発見されたことで調査団員の移動ゴチには一段と力が入った。参観者石川修氏ほか

一〇月一三日(土)晴

Bグリットの発掘を行ない、B4から

古銭(永樂通宝)を発見。史実解明の手がかりともいえる古銭の発見や昨日の神像片の発見に団員の目は輝き、調査に一層の熱気がこもる。参観者 小林徳雄、下田由人氏ほか

礫石の確認を行ない、二号堂址に三メートル正方のグリットを設置した。午後、顧問の金井喜久一郎先生が指導と激励にみえた。

一〇月一〇日(水)晴のくもり

午前は、第一号堂址と第二号、第三号堂址との間の下草刈りを行ない、Dグリットから約一〇センチ掘り下げる発掘作業に入った。

午後も全員で発掘を行ない、C1のグリット表面から白磁片を発見。

一〇月一四日（日）晴

Bグリットから重要遺物が発見されていることから、さらにBグリットの遺物発見に努めながらAグリットの発掘作業に移った。

Aグリット西角の礎石表面に曰様の線が刻まれているが発見。堂建設の基準に使用したものと思われるが貴重な礎石である。第二号堂址の発掘が、ほぼ終了したので、第三号堂址に二メートル正方のグリットを設定した。お親者 遠藤寛氏ほか

一〇月一五日（月）晴

第三号堂址Hグリットから発掘を始める。Hグリット南側に土止めに使用したと思われる石が並べてあることを新たに確認。Gグリットの発掘も合せて行なった。お親者 長針功氏ほか

一〇月一六日（火）晴

昨日につづいてG・Hグリット西番付近を発掘した。新聞記者等

が取材に訪れ、金井團長の説明に熱心に聞き入る。

一〇月一七日（水）晴

E・Fグリットの発掘を開始。中野平中学校生徒十数名が発掘作

業に参加した。また、水道課技術の応援を得て、電波探知器による金物遺物の探査を行なった。午後、不動明王の剣の破片をH5から発見。団長金井先生は、しだいに堂の性格等が判明してきたことを示唆された。

一〇月一八日（木）くもりのち雨

午前は、丹念に調査をする必要があると思われるグリットについて、さらに発掘を行なうとともに堂宇の規模、礎石の形等、建設課



第2回 調査メンバー

技術の応援を得て平板測量を行なった。午後も雨足のしげくなる中で平板器の上にシートを張り測量を行なった。永沢技術は、アリーダーをのぞき懸命に頑張ってくれたが、暗くなるにしたがつて、ボールを見ることができず、やむなく測量を中止した。14から小

一〇月一九日（金）くもり時々雨

台風一八号の接近で天候が危ぶまれたため、一部測量や埋戻し、撤収作業が残ったが、本調査計画の最終日でもあるので、報告会と懇親会を、午後、間山公会堂で行なった。

田長金井先生から中間報告という形で発掘遺物や堂宇の見取図に基づいて、建心寺の性格、第二号、第三号堂址の規模等について詳細な報告があり、また、顧問の金井喜久一郎先生からは約三〇分間にわたりて歴史的背景と今後の調査ポイントについてお話しをいた

だいた。間山区長さんははじめ調査に協力いただいた皆さん約三〇名が熱心に地域の歴史に耳を傾け、建心寺跡が鼎下でも類例のない重要な史跡であることを確認しつつ、文化財保護の思想が間山地域に根ざしてきたことを感受した。また、残された測量は、一〇月二二日、二三日、植原調査員と池田調査補助員とによって行ない、埋戻し、撤収作業は、一〇月二十五日に行ない、本調査は終了した。

このように今回の調査も第一次発掘調査につづいて、建心寺跡探究のための多大な成果をあげることができ、この間、秋のとり入れ時期であるにもかかわらず、本調査にご協力くださった方々のご芳名を左にかげ感謝申ししあげたい。（敬称略・順不同）

矢野修自 牧野政一 海野福松 鈴木正信 酒井一 酒井安明  
羽村邦義 中山製市 羽野四雄 関取茂善 羽野正人 小林東助  
阿部光彦 市川広吉 黒岩方吉 阿部常男 土屋照雄 萩井猛  
海野昭二 関谷清雄 小林男生 小林保子 海野一男 土屋恒平  
矢野儀一 古川安公 斎野桂 海野静夫 牧野恒子 古川今朝治

土屋照雄 小林恒子 小林正志 小林勇男 佐藤とみ子 関取久江  
米沢弘夫 湯本彦次 武田勝 永沢知之 佐藤嘉市 山崎義郎

畔上克臣 小林三史 海野道一 関取昌弘 小林充 小林勝  
和田幸治 矢嶋明美 横谷由紀子 畑内直子 沢木千代子

瀬口恵里子

## 二、建心寺をめぐる地名

日野村誌によれば、「天台宗智門院建心寺は七堂伽藍、塔頭十二坊あり」と記されている。以下 仁五堂、十二坊社について乏しい文書から略述する。これはいずれも考証されたものではないが、今後の調査研究に俟つかははない。

### (1) 仁王堂

間山区所蔵の後地帳には延宝三年（西暦一六七五年）以降数次にわたり検地がくりかえされ、写しが改められたものがあるが、天保四年（西暦一八三四年）九月の写と天保十四年（西暦一八一四年）卯八月の古絵図で終っている。

この検地帳と古絵図の地番と照合して見る時、建心寺跡附近の西斜面の大部分四、五筆の畠地が仁王堂地籍となつていて。おそらくこの西斜面に仁王門址があつたと推測される。第二次調査の表面探査でも土礫器片や灰釉片が見つかったり、門址としても格好の場所もあつた。しかし江戸初期頃から明治初期にかけて耕地となつてゐたところであり現在また杉林になつてゐるためこれが確認は至

第1表 坊関係地名表

坊 名	現 地 名
1 道 光	道 光
2 し ゃ 光	しゃぐじ
3 武 道	舞台 (ぶと)
4 阿 光	阿 光 (坂) (あきらめ)
5 な ん 光	南 向 平 (ながひら)
6 善 に ん	川 端
7 安 心	粟 煙
8 丹 心	田 し ろ
9 たっしよう	たちよう場
10 三 光	三 光 坊 (さんこぼ)
11 宇 道	鳥 真
12 石 道	石 の 塔

坊跡は建庵寺跡一帯が階段状の地形のところが多いため、あるいは寺屋敷附近に散在していた可能性もあるが、源野氏藏の「重代水長覽」(書体は記載内容から江戸中期頃のものと推定)の一節に、  
 軒のう寺十二坊居宅よりがいに取道光坊と申跡は道光と名生といふ  
 いしや光坊と申跡は名生しや光寺と申武道坊と申跡は武たい(舞  
 台)と申(中略)、けんのう寺のいわく尋ね候ならば戸隠本坊に  
 てことへく明細に書付あり。

以上十二の坊名と現在の地名の呼び名と共通する点も多い。尚こ  
 の地名を問山区の中でもみると、十二坊の内七坊は耕地や村落の中に  
 あって、五坊は山中に位置する。

(2) 十二坊

坊跡は建庵寺跡一帯が階段状の地形のところが多いため、あるいは寺屋敷附近に散在していた可能性もあるが、源野氏藏の「重代水長覽」(書体は記載内容から江戸中期頃のものと推定)の一節に、  
 軒のう寺十二坊居宅よりがいに取道光坊と申跡は道光と名生といふ  
 いしや光坊と申跡は名生しや光寺と申武道坊と申跡は武たい(舞  
 台)と申(中略)、けんのう寺のいわく尋ね候ならば戸隠本坊に  
 てことへく明細に書付あり。

以上十二の坊名と現在の地名の呼び名と共通する点も多い。尚こ  
 の地名を問山区の中でもみると、十二坊の内七坊は耕地や村落の中に  
 あって、五坊は山中に位置する。

### 三、造 構

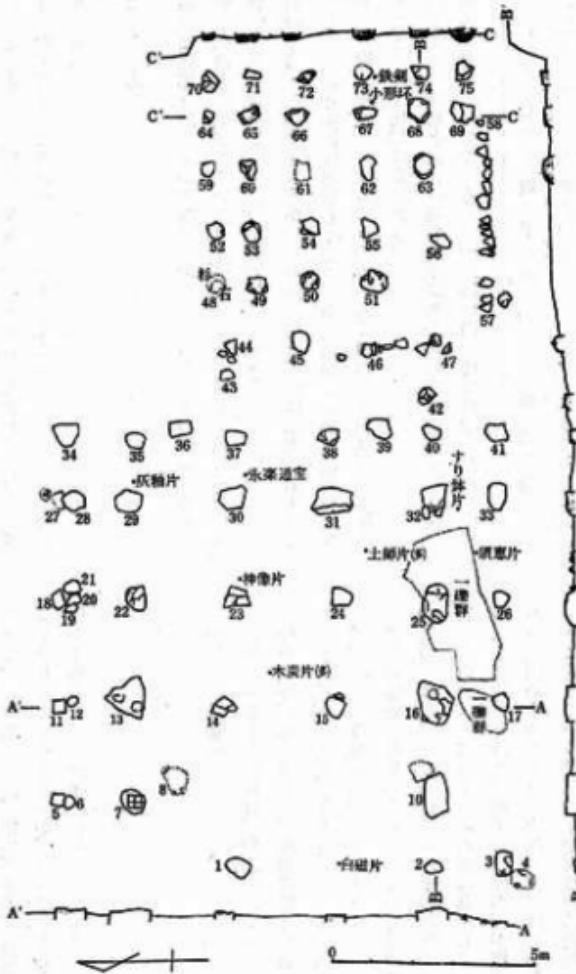
#### (1) 第二号堂址

本年度調査した面積は、約二三三平方メートル(七〇坪)に及び  
 二棟の堂址が確認された。西側の堂址を第二号堂址、その東側(山  
 頭)の堂址を第三号堂址として、一応別々の性格を有する堂址と考  
 えて、第二号堂址から説明する事とする。

第二号堂址は昨年調査した、第一号址の北方約一七・八メートル  
 (裏石間)離れ、その間はほぼ水平の地形である。末調査の堂址の裏  
 石が北方約四・二メートルの所に露出している。発掘前の現状は東  
 西に中心線で分けて、南北分は裏石面が露出していて、北半分は山  
 から流出する土砂により、次第に深く埋められて最も深い所で四〇セ  
 リチに達している。三〇年生前後の杉森林地の為め、調査不可能の  
 個所があるのは残念だが致し方ない。次に裏石面の観察を記録する  
 と(第三回)(1)(2)は廻縁東石で、神道に重複している為めか、その間  
 の三個程が失われている。また西方を正面と考へて廻(向拝)の有  
 無を確認の為め、試掘したが、礎石が存在しなかった。(1)(2)(3)とも  
 五〇厘米内外の自然石(10)を除いて全箇同じで(4)は、移動した礎石と  
 考えられる。(5)(6)は北側の廻縁の東石だが(5)の面が(6)より九センチ

(小林算司)

第3図 第二・三号堂址造構図



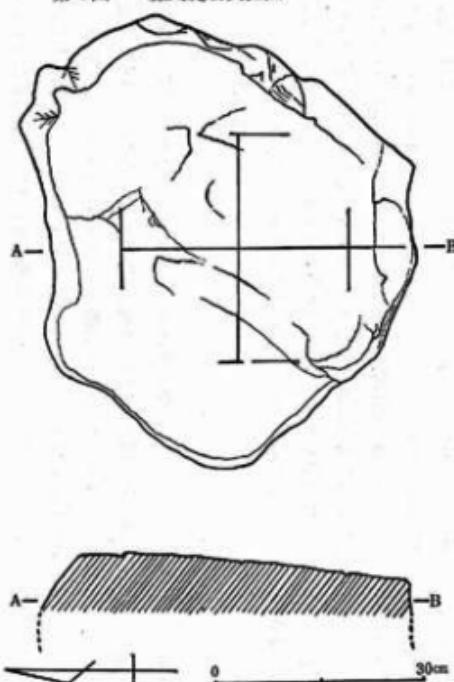
高くなつておひ、第一号堂址の廻縁の平面に二個並列の例と違ひ段差の有る並列となつてゐる。

(7)は今回の発掘で特筆される礎石(第四図)で径は五〇×六〇七セントで真中に僅かに焼けた痕跡のある石で、その面に記された陰刻は建物の基準を示めす為に製成は鍛などで刻まれた、深さ〇・五

ミリ、巾一ミリ内外の線刻で、中心線が両側につき抜けていて、東西南北の線は中心に十センチ内外しかなく、四角の直徑は約三三・三センチで、この事は、第一号堂址の規準尺の考察から、高麗尺系統(或は大當令の大尺)の規準尺(通管)の数値の確定に寄与する単位で、円柱の径の、三三・三センチは規準尺の九寸と換算すると尺一、一二尺、三七七寸となつて後述の建物の規準尺として使用されたと考えられる。

次に興味を引くのは中心線の方向が現在の礎石の方向とはほとんど一致して真南北を指している点で、第一号堂址も同一方向であつた。ここで考えられる事は、天体と仏教の關係で特に北斗七星は斗柄(けんさき)の方向で時刻、時間の観測が可能で、地平線上に沈まないなど季節に関係なく

第4図 線刻礫石実測図



す基準とされ、建心寺の建立にも多分この方式が用いられ、造営された建物が、当時の天文台の役割を持ち、祝祭者（修驗者）の宗教化に役立っていたと考えられる。

(8)は植林、風倒木などの理由により移動したと考えられる石で、それそれを礫石としての面を持つている。(9)は柱の中心点がやゝ西方に寄っているが、山五二センチ長さ一メートルの面を有する石が東西を軸として使用されている。(10)は五稜塔の台石（地盤）で石質は安山岩で赤褐色を呈して、近くでは猪首山産山の石材に似ている。

加工はやや粗雑で北面三四センチ、高さ二六センチ、西面三三センチ、高さ二三センチ、南面三四センチ、高さ二六センチ、東面三五センチ、高さ二四センチ、文字は無く下面は安定を図る為、浅く円く凹ましている。(11)との水平面の差は七センチとなっている。(12)

は底辺、長さ一メートルを数える三角形の大石で柱跡はやゝ西南に片よっており、墨すんだ跡跡を残している。(13)は(12)と対をなす大石で柱跡に似た箇所が柱の測定位置より約三〇センチ程ずれていて柱跡を残す点だろう。(14)(15)(16)は(12)を水平として時とは五センチ、(17)とは一八センチの差を示し四個の石が一団となっていた。(18)は三三センチ程の深い柱跡があり、(19)と(20)の面は十センチの差があり、(20)は杉株で約半分の露出である、(21)の石は少し北にずれた感じになっているが、(22)は南北を軸に使用され、(23)は中心に柱跡と思われる痕跡を残し西側が崩れている。(24)の水平面が(12)より一四セン

チ高くなつており、西(西)(西)の面と水平を示す点を考えると建築後  
の修補の為めかとも考えられる。33と34が廻縁の礎石の直列よりや  
くそれで位置的には対をなして存在するのが注目される。全体的に  
見て第二条墓址の礎石面の火熱の跡が弱かつた様に察せられる。

以上で礎石の概観を終つて建物の規模に移ると一辺七・四メート  
ルの三間四面のお堂で造営尺では二〇尺となる。(以下尺は造営尺)  
西面、南面の廻縁米石と主柱礎石間は一四八センチ(四尺)で東面  
の廻縁米石は一六六・五センチ(四尺五寸)だと思われ、北面は(6)

33と34が一四八センチに該当するが、(5)(6)(7)(8)列とすると約三五  
センチの差がある、一八五センチ(五尺)だとすると外の面より広  
くなるが廻縁の中(内側)にまで影響があつたかどうかは判らない。  
主柱間の距離は一四〇・五センチ(六・五尺)一一五九センチ(七  
尺)一一四〇・五センチ(六・五尺)の建物と考えられ、これより少  
し規模が小さい建造物で鎌倉時代に出来た下伊那郡大鹿村大河原上  
にある福徳寺本堂が近似した建造物と考えられる。

### 〔丁〕第三号墓址

第三号墓址には並行して東側に第三号墓址がある。礎石面での比  
較は、三号墓址面が八〇センチ程度くなつておる。北東の礎石は山  
腹より突出の土砂に約四〇センチ埋まつておる。東西の所の礎石が四  
個失われていた、まだ露出した礎石面が造林に伴う焚火等で黒す  
んだ個所も見受けられる。他の周囲一・五メートル程が攪乱され五  
個の石が集石され約三〇センチ程凹んでいた。使用されている自然

石は径三〇一五〇センチ内外の石で柱跡の明瞭に判定される痕跡の  
有る礎石は無いが表面積から割出して径一〇一〇センチ内外の柱  
(角・円は不明)が使用されていたと思われる。第一・四列の南側で二  
個の礎石が失われているが、その西側のやや傾斜した所に有る33  
と34等の石が礎石の移動した石と考えた場合は北及び東側の外縁の  
礎石の間隔から九三センチ内外の巾で並んでいたと考えられる。

規定尺を二通り選定して測定してみた結果を記すと、(一)三七セ  
ンチ尺の場合南北側かい、

〔甲〕

3尺	5尺	6尺	8尺	10尺	12.5尺	16尺	20尺
111cm	129.5cm	166cm	122.5cm	92.5cm			
合計	17尺	625cm					

(二)の場合三一・二五センチ尺

(A)	37cm尺	11.5尺	42.5尺
(B)	31.25cm尺	13.5尺	421.875尺

次に建物の規模であるが、礎石の大きさとい配列から廻縁が有ると  
考えた場合。

(A) 37cm尺 11.5尺 42.5尺

(B) 31.25cm尺 13.5尺 421.875尺

となり仮に廻縁の無いと考えた場合は前田の(一)(二)の合計尺とな  
る。また(一)列に礎石が無かつたと考えた場合、西方を正面と見  
なしてはならないが、第二号墓址の礎石の配列との不整合が気にかかる

る。第一・二号の配石を雨落造様と見て通縫の有る入母屋作りの建築を想定して、一応南側を正面であると考えた。

注一 「二五年を迎えた難波宮跡」長山雅一信毎五四、二、三、時代はさかのぼるが前・後期の宮殿跡が、中輪跡が共有しほと南北の方舟で通縫されていると報告している。

注二 長野縣自然史典六九四頁、写真は昭和二十九年解体修理前の撮影で一・五メートル・一・八メートル・一・五メートルの主柱四本四面の入母屋作り、磚縫重石は一面六個である。

(鹿原長治)

#### 四、遺物

第二・三号堂址の発掘によって出土した遺物は第二表のとおりである。土師器片四六一点、釘頭三四四本、灰紗一〇片、珠洞鏡九片、鐵器片三点、石英石片三点、土製神像片(頭部)一点、古錢(永泰通宝)一枚、小形模造鐵劍片一点、毛拔狀銅器一点、白磁片一点、陶器片一点、木炭片多量と「遺構」の項で述べた東石に利用した五輪塔の台石(地軸)一点を検出した。なおこのほかに、寺城入口の土堤から五輪塔の空風輪一点が表面採集されている。

(金井次)

第2表 出土遺物一覧表

グリット		土 師 器 片	鉢 底 片	缸 大	中	小	灰紗	珠洞	その他	摘要
第二 号 堂 址	A	2	2	1						(大形土師片2) 川原石(丸)1
	3	2	2	2		1				
	4		1	2						
	B	1	2	1	23	1	1			石英石1 陶器片1
	2		1	6	1		4			
	3		4	5	31		1			木炭片 神像1 (大形土師片5)
	4		12	33		1	1	7		古錢1 (永泰通宝1) 川原石(丸)1
	C	1	1	1	9		1			白磁片1
	2	1	1	5						
	3	2	8	12	1	1				鐵器片1 (大形土師片2)
	D	4	8	4	119	1				鐵器片1 (大形土師片11)
	計	27	45	291	4	7	9	7	9	
第三 号 堂 址	G	1	1	7						
	2			1						
	3	1	1	2						
	4	14	9	13		1				(土師器片に油煙付着) 石英石1
	H	1	2	3				3		
	3	2		3	1					
	4		1	1		1				
	I	2	2	7						
	3	4	1	2						
	4	2		6		1				
	5					2				
	K	1				1				
	3			2	4					
	4					1				
	5					2				
	計	26	18	54	1	8	5	3		

(一) 土師器

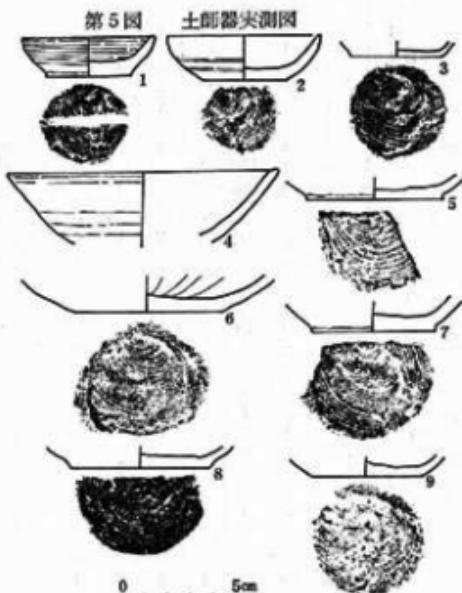
土師器は略々完形の小形杯が第三号堂址（H4グリット）から発掘された。その他はいずれも破片で、第二号堂址からは三六三片、第三号堂址九七片の合計四六一片に及び、土陶器片の九五・六%を占めている。第二号堂址の内陣と思われるB34、C34、D4に集中的に存在した。第三号堂址では床面の全面から散発的に検出されたが量も少ない。第五図・第三表はそのまとめである。

第三表 土 師 器 表

9 坏	8 坏	7 坏	6 坏	5 坏	4 坏	3 坏	2 坏	1 坏	番 器	口 径 cm	底 径 cm	胎 土	烧 成	色 调	出土地点
5 含砂粒	6.2 良	5.5 良	6.8 良好	6 良	4 良好	3.8 良	3.8 良好	2.7 坚	外 内 褐 色	外 内 褐 色	外 内 褐 色	烧成	色 调	出土地点	摘 要
脆 や や	堅	堅	堅	堅	堅	堅	堅	堅	土 師 器	ロ ク ロ 整 形	内 側 に 油 煙 痕 あり	土 師 器	ロ ク ロ 整 形	内 側 に 油 煙 痕 あり	出土地点
内外褐色	外内黑色	土 師 器	ロ ク ロ 整 形	内 側 に 油 煙 痕 あり	土 師 器	ロ ク ロ 整 形	内 側 に 油 煙 痕 あり	出土地点							
D4 含砂粒	D4 良	J4 良	J4 良好	D4 良	C4 良	B3 良	H4 良好	土 師 器	土 師 器	土 師 器	土 師 器	土 師 器	土 師 器	土 師 器	出土地点
内側に油 煙痕あり	土 師 器	系 切 底	系 切 底	系 切 底	系 切 底	系 切 底	系 切 底	系 切 底	出土地点						

(1)は口縁の一部に少し欠損があるが、略々完形の小形杯で、暗土焼成とともに良好の比較的厚手作りのものである。細い系を使用して底を系切り後、棒状工具によって巾四~六ミリ、深さ一~三ミリの直線を捺押されている。内側には油煙痕が黒く残存し、灯明皿として使用されたものと考えたい。なお、杯の内側に油煙痕を残すものは、このほかに数点をかぞえるが、いずれも灯明皿として利用されたものであろう。

土師器はいずれも杯の破片で、系切底である。極く細片は別として拓影によって観取できるものは三〇余点に及び、第二号堂址のグ



リストからは A 34、B 4、C 4、D 34 で内陣とおぼしき付近から出土が多く、第三号墓址では J 34、I 3 から検出され、小形模造鉄片山土付近に集中している。

糸切底とその器形から國分寺の終末段階の土器と推定する。

(金井文司)

## (二) 土製神像片・その他の遺物

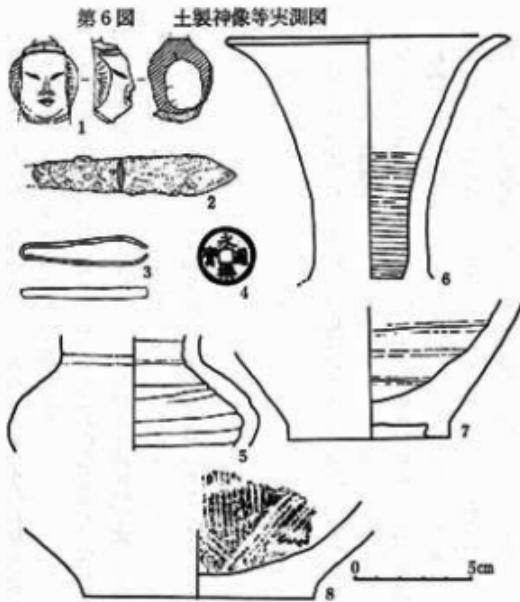
土製神像片 第六図(1)、第二号墓址の礎石西側の地表下二〇センチから検出された頭部の残欠である。冠の頂点も欠き、現高三、五センチ、重さ一〇・三グラム。良質粘土製で焼成もかなり良好で黄褐色を呈し、背面には塑型に挿入した際の製作者の指紋が残ってい。顔は温雅でふつらとし、眼は切れめが長く串り上り、半眼開き。鼻筋はよく通って高く、鼻口は左右の均整を保々欠き、上向きで、口は割合に小さく下唇は少し厚いが引き締っている。首以下の下半身を欠く。製作は前半身を塑型に挿入して作り、後半身を火くところから、御正体の如く鏡板状の箆板に付着して作るしたものであろう。

永樂通宝 磚石西側から銭文を上向きにして検出され、出土地点は廻縁の下にあたっている。この古銭は明の成祖代の四年間(1402-1403)にわたくて铸造された銅貨で、室町幕府の遣明船によつてわが国にもたらされ「御足」(用後)と呼ばれ、広く全国に通用したものである。出土銭の銭文は極めて明瞭で、唐紙の痕は見られず、径二四ミリ、重さ二・一グラムを算定表裏とともに青銅に覆われ

ている。第六図(4)。

小形模造鉄片 第八図(2)。現長八八ミリ、重さ一一・九グラム、鍛造不充分のため錆化が甚しく、所々に錆瘤がみられる。第三号墓址礎石西側から検出され、山崩れ土砂のため地表下六〇センチのところから発見された。不動明王が右手に構持する剣と考えた

毛拔状銅器 長さ五五ミリ、重さ四・一三グラム、巾四ミリ、厚



さ一ミリで礫石の南側から発掘したもので、前記剣出土地点の近傍である。(第六図⑤) 銅は少なく、くすねた銅色を呈しているが、用途については毛抜きであつたか、あるいは、灯明の芯をかきたてのために使用したかは不明である。

灰釉瓦片 第八図⑥は礫石の西側付近から検出され、頸部・底

部を欠く、比較的小形のもので、胸部は彫形を呈する厚手作りの壺である。製作は割合に粗雑で焼付けもあまり良好でない。

灰釉長頸瓦片 磐石の周辺から八片が出土し復元したものであるが、胸部以下は欠失している。(第六図⑦) 口径一二センチ、頸高一〇・五センチでラバ状に開く。器面は淡黄緑色を呈し、整形袖付けとともに念入りの良質のものである。

珠洲燒整片 第六図⑧は礫石の西側から出土した。割合に厚手作りで、高台を付け内外ともに灰青色を呈し、器面に刷毛目調製の痕をわずかに残している。

珠洲燒整片 磐石の西側の中間から検出された。(第六図⑨) 内

側には一〇条の櫛状工具によって放射状に焼き、櫛鉢としての機能を果す施文があり、底には荒い刷毛目文をつけている。器肉は厚く

昭土焼成ともかなり良好で灰青色である。この種の櫛鉢は市内においては昭和四年春に第二次安源寺遺跡発掘調査の土葬墓地(金町時代)から一点の出土をみている。

白磁片 第二号堂址の正面、すなわちC—グリットから皿の一部分と推定される白磁小片一点を検出した。薄手作りで、口縁は内側に折返し痕があり乳白色のかなり良質のものである。

鉄釘 総数三四四本の出土をみた。第二号堂址からは二〇本、第三号堂址一四本である。第一表の分類は「大」は八センチ以上、「中」は三センチ以上、「小」は三センチ以下とし、大釘五本、中釘一五本、小釘一四本で、いずれも鍛冶手打ちの四角釘であるが、鋸化が甚しいものばかりである。

鉄器片・鋼片 三片の鉄器が発見され、小さく細長い鉄板に二孔のあるもの一片、かすがい片一点、その他である。明治時代に第二号堂址中央部に松小屋が建てられたことがあるというから、これらの鐵片はこの山仕事に関係するものであろう。また小陶器片も同様のものであろう。小陶器片は茶碗の破片である。

その他の遺物 石英石三点は、鳩の卵大で乳白色を呈し、火打ち石に利用されたものと考へたい。灰や木炭細片は遺構の全面に見られたが、B2・12グリットからのものは比較的大形のものであった。このほか前述の五輪塔の地輪と空風輪が発見されている。

(金井義次)

## 五 むすび

建心寺址は中野市大字間山字建心にあって幻の寺院址として伝承されていて、標高凡そ七〇〇—七二〇メートルの谷あいを削平して寺境を造成し、境内は約七〇〇〇平方メートルの広さをもち、参道も極めて長く、深山幽谷のなかにある。第一次発掘調査(昭和五一年一〇月)によつて第一号堂址(七・八×七・八メートル・周塀付)の遺構を検出し、銅製御正体三面のほか幾多の遺物を発見することが

できた。

今回第二次発掘調査は昭和五四年一〇月九日から一九日にわたる一日間に及び、参加人員は一九一名、発掘調査面積は二三二平方メートルであった。秋の天候にめぐまれて予期以上の成果を収めることができた。

第二号堂址は真西に向き、間口・奥行共に七・四メートルで丸柱跡は直径三三センチメートルである。礎石群のはんどは旧状のまま残り、周縁の束石もほぼ原初のままであった。ここで特筆したいことは、西北隅に据えた一個の礎石に一辺三三センチ方形の縁を陰刻されていた。この堂宇沿革の水準と方位の基準となつたもので、新見出として建築史上に寄与することが大きいと思われる。堂宇は表上し礎石に丸柱の痕が残り、また焼けたため礎石の一部分解したものも見受けられる。

土製神像片は頭部残欠であるが、現今も所々の神社に奉祀されてゐる隨神に近似のものである。年代については、にわかに判定し難いが、赤陶造形、珠洲燒窯鉢片の出土等から中世中葉に該当させてよいのではないか。

石の形状から径二〇センチ前後の柱が用いられたと考えるが、円柱であったか、角柱であったかは不明である。

第三号堂址は、このように幾多の問題点をもつものであつたため、発掘調査中に県文化財保護審議委員である大河正房先生（平素大慈愛）に現地指導をお願いすべく御連絡申しあげたが、折から海外御出張中とのことで、御指導を謁わることができなかつた。後日、機会を得て現地で御教示いただきたいと思つてゐる。

小形模造劍片は不動明王持持のものとすれば一四世紀以降盛行した山岳修験にかかるものであろう。寺城を西へ向つて流下する十二川と呼ばれる小川の存在や、その流域に聚落場と目される遺構等から勘案すれば熊野系修験に関係するものであらう。

二回に亘るささやかな調査によつて、三棟の堂址と各種の遺物を検出した。しかし、広大な寺域からすれば、二回の調査も諸についての段階であるといわなければならぬ。今後、さらに発掘調査を継続するとともに学術的総合調査を実施し、その全貌をたしかめる必要がある。

（金井敏次）

